

溺れる』のら』を見ながら』マナ』は考え込んだ。「そう言えば、この家の風呂はこの家に引越してきた時、あまりに湯船が浅いんで、自分で湯船を深く作り直したんだよね。以前のは、』のら』が入るための風呂だったんだから、浅くて当然か」とブツブツと独り言をいった。そう言っている間も、』のら』は手足をバタバタさせ、ミャーミャー鳴いている。』マナ』は慌てて、ブクブク沈む』のら』を摘み上げた。

』マナ』は次の休日に風呂場の改修を始めた。湯船に入るための階段と、出るための階段を作り始めたのである。結構』マナ』は器用であった。』のら』はその傍らで、釘でお風呂の床に落書きを始め喜んでいた。』のら』の』のら』の』のら』は知らない」と言いながら。』マナ』は木槌で』のら』の頭を殴った。』のら』の頭は空洞なのか、とても響く良い音がした。』のら』は頭を押さえて痛がる素振りを見せたが、すぐに嘘だと判るほど演技が下手であった。』マナ』はもう一度叩く素振りをみせると、』のら』は慌てて』マナ』の手伝いを始めた。しかし』のら』の手はズングリしていて、なかなか物をうまく掴めない。どうにか両手で挟むように木の板を持ち上げたが、過って湯船の中で作業している』マナ』の頭の上に木の板を落としてしまった。』のら』は「いめん」と言って』マナ』の頭をさすった。』のら』はさすりながら「ニヤニヤ笑い、」と「トント」と叩いた。』マナ』の頭は後ろが潰れていて少し平らになっていたのである。その後』のら』は、その平らな部分を何故かすぐに撫ぜる癖が付いてしまった。それは』マナ』を馬鹿にしているのか、遊んでいるのか、その度に』マナ』に怒られるが、気にしない』のら』であった。

